

山と博物館

第27巻 第4号

1982年4月25日

大町山岳博物館



キクザキイチリンソウ(居谷里湿原にて)

再興成る大町山岳博物館

松本や南安曇から見る北アルプスは眺める山であるが、大町ではじかにせまって正に向いあう山である。大きな自然が小さな人間を包んである時はゆったりとおおらかに優しく、ある時は逃れようにも決して離さない厳しさで対決を強いられる。こんな自然の中にあつて大町の先哲は北アルプスの自然と大町の人々が深くかわり織りなしたあかしを後世に永く保存し、顕彰し、生きる道しるべとするために大町山岳博物館が創設された。それは第二次大戦後の人心が荒廃した混乱期で、当時は他を顧みることがなく自らが生きることに精一ぱいであつたのに、覇気に満ちた大町の青年たちが相寄り、経済がいかに低迷し暮しが貧しくとも先人の業績や遺産を何としても後世に伝えたいと願つたのだつた。わたくしは折に触れて当時の青年達が思いを高く掲げ、その実現に努力されたひたむきな情熱に胸のあつくなるのを覚えるのである。

新装成る山岳博物館は現在の博物館の東側に面目を一新して三階建ての近代建築で六月五日に誕生する。この館は現在の展示物を殆どそのまま引継ぐとともに新たな構想による再興を意味している。総工費約五億円、面積二二〇七平方メートル(地下一機械室、一階一展示室、事務室、収蔵庫、教室、講堂他、二階一展示室、研究室、収蔵室、図書室、休憩コーナー等、三階一展望室) 請負を伝刀組他二社へ、展示品作成を国立公園協会へお願いをし、既に運営委員会の議を経て館の条例改正も行つてオープンする運びとなつた。

今後展示等については常設、特別展ともに北アルプスと大町市を設立母体とする特色を生かしながら新鮮な感覚でのぞみたい。収集・保管・調査研究等についても、この地に根をおろした社会教育機関の使命を果しつつ、ひろく岳人、この道の研究者にも役立てるものになりたい。どうかこの館が創設当時の情熱を更に凌駕して発展するよう市の皆さん方のご支援ご助力をたまわりたい。

(大町市教育長 一志開平)

借馬遺跡

原田 暁

はじめに

借馬遺跡(かるまいせき)は、長野県大町市大字平の借馬に続く東方一帯の水田下にある遺跡で、場所が水田の表上より深い所では五十センチも下にあり、年代から見て、五世紀頃をほぼ上限として、それから約五、六百年の間に残された古代の人達の生活の跡であるということなど、この地方としてはかつてなかった程の特異な遺跡として、注目されたものです。

私がこの遺跡と出合うこととなったのは、昭和四十五年の二月末のことでした。ある地名の調査でこの水田の中を通る農道を歩いておりました、直ぐ横を小川が農道と平行して続いており、その水の濁れた底に土器片が散乱しているのです。思わず目をこらしてよくよく見ますと、まぎれもない古代の土器の破片で、須恵器(すえき)と土師器(はじき)



ブルドーザーで表土を除去する

の類です。これには驚きましたが、とも角その近くを探して相当な量の破片を採集することが出来ました。幅三十センチ程の用水路の中です。それから程上流から流れて来たとは思えません。又この附近には現在一戸も家がありませんから、遠くの人々がわざわざこの所まで土器片を持って来て捨てたということも考えにくいことです。こうして見ると、この土器片はこの近くに当時住んだ人達が残したものの一部ではないかと想像がされるものであつて、現在は一帯が水田として開かれていたもの、古代には人家が散在していたことも考えられて、この附近の地名を改めて調べたものでした。この時調査していたのは、青木という地名で偶然にも土器の採集した場所から東南に青木という地名が続いていたのでした。

私が青木について注目していたのは、長野県内に青木という所が現在十四箇所見られ、それは古い交通路に沿い、又は交通路の交差する重要地帯にあるということや、これらの青木を中心とした附近は、中世の皇室領であったり中央の神社寺領とか撰関(撰政関白の家)領などと特に関係が深かったのではないだろうかという考えがあつたからです。しかしそれを証明するものといえば、青木という地名の場所を考古学上の調査を経なければならぬことであるので、その実行は全部の青木に対してはとて不可能なことであると考へていた矢先のことでした。

私はこの借馬の青木こそ大事な考古資料の出土した場所であると、その農道と水路を追う形で北方へ遺物を調査し、広い範囲にわたる借馬遺跡という名称を付けました。

借馬遺跡の緊急発掘調査

昭和五十年代に入ると、大町市の土地改良区を管理する事務所では、市内にある古い水田地帯で耕作に不便な所を中心に、相当なまとまりの面積があれば、国や県の助成を受けて大型化する為のほ場整備事業に着手するという計画があり、この事業を知ることとなったわけですが、市の教育委員会として、これを機に借馬遺跡の緊急発掘調査が大きな課題となつて来たのです。

そこで文化財調査員を中心とした細部の分布調査と発掘計画が日程に上り、昭和五十四年から五十六年までの三年にわたり調査が実施されることとなりました。

発掘調査をするとなれば、調査団の編成が大事なことです。私は特に要望して、測量と写真について技術の明るい人から調査団員に入ってもらふことを重視してほしいと申しました。これは適任の人が参加してくれることとなり、その後の調査に充分に腕を發揮してもらいました。

それというのは、調査団とはいへ、団員の人達は日常忙しい生業をかかえていて、連日発掘現場へ出掛けるということが出来ないというところ、こうした間に重要な遺構が次々と現れて来て、大事な場所や必要な時に記録に取ることが出来ないという事態が起り、それでは遺跡を掘って遺物を取り出すということでは出来ぬもの、只それだけでは正確な記録などは期待するわけにはいかないということ。まして、緊急発掘であるからには、スピードと精度が要求され、何月何日という調査期限付きということが普通でありますから、出来る限り急がなければならぬということ。私は一人の偉大な調査員よりも、部門毎にその分野の専門的知識や技術を持った調査員多数が協力し合つて進めて行く調査こそ、こうした学術的調査の行き方として正しいものと考えたからです。

そこで大町市としても調査団が編成されて、



借馬遺跡の発掘 55年4月

いよいよ昭和五十四年の四月から借馬遺跡南端のA地区を調査することとなりました。ここは私が昭和四十五年二月に土器片を採集した場所に当たります。大きな期待でブルドーザーの力強い作業を見守る中に次々と黒色土の落込みが見つかり、これらは調査員の人達によつて竪穴住居址や柱穴址などが明らかにされることとなりました。

三年間の調査で一応予定地は終了しましたが、これによつて竪穴住居址八十四戸、掘立柱の建物址三十六棟などの他、古くあつた川の跡地点、人工の水路、大小の落込みによるピットなどから、これらに関係して土器の類では、土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器など多数と、鉄製品と磁石などが発掘されました。

古代の生活

現在進められております昭和五十六年の調

査の結果を若干ですが入れて、借馬遺跡に古く住んだ人達の生活を考えて見たいと思います。

そこで第一に古代のこの地方の環境です。借馬遺跡の形成は主として五世紀頃を上限にして、十一世紀頃までの間です。この時代の地勢は現在とほぼ同じ状態であったと思われます。しかし鹿島川もつと東へ分かれていて、その一部は遺跡附近を流れており、現在の農具川も木崎附近で分流していたもののように、一帯はこれらの小河川が網の目のようになって東南方向に流れていたもののように思われます。

こういう環境の中では、川が安定していれば川の近くに家を建てて居住することが出来て、更に水田も開くなどしてそこに定着することも考えられます。木崎から流れ出る農具川は夏期の水温が高く、水稲栽培には古くから目を付けられていたものと思われま

す。こうして平坦で肥沃でもあり、水利に恵まれた借馬一帯は古代の人達により開かれつつあったのですが、弥生時代の遺跡はほんのわずかであったことは、何らかの問題があったものとも考えられます。

さて、以上のような所で家を建てて居住したわけですが、その家とはどのようなものだったのでしょうか。私達は期待しながら調査を見守る中で、次々と大小の竪穴住居址が発掘されたのです。竪穴といえ、地面に直（ちよく）に下へ掘った穴ですが、住居ですから或る程度の形が整ったものでなければならぬもので、この五世紀代の竪穴住居址を見ますと、ほぼ四角い形をして下へ掘り下げている、深さは五十センチ位はあり、方形の一边の長さは六センチ位はあり、方形の一角の長さは六センチ位はあり、又中には三センチ位の小型の竪穴もあるという状態です。竪穴の床面は平にならされているものが多いのは当然ですが、四本の支柱と思われる穴の址や、火を使用したことのない竪穴も多く、これは

家の構造と共に火の管理について、非常に大きな問題ではないかと見られます。一方では床面に四本の柱穴址がきちつと掘られているのに、内部には全くそれらしいものが見当たらないというところは、それだけのものが外部に樹てられていたと考えるべきでしょう。

借馬遺跡の場合のみではなく、前に述べたように竪穴住居の中において火を常時使用するようになるのは、ほぼ六世紀まで下ることも考えられます。

そこで六世紀代の住居になりますと、竪穴の北壁のほぼ中央を切つて、かまどが造られます。この地方に多い矢沢石という細長い安山岩を使い骨組みにしながらかまどで築いていき、家の北へ煙出しの穴を出しながら造るのです。長野県塩尻市平出の復元された住居を見てもらいますとよくわかります。あのような形の家が借馬遺跡にも建てられていたのです。

こうした形のかまどへ土師器の甕をかけ、湯を沸かしたり食物を煮炊きしたものです。これらのかまどの前面の床は、灰や炭や焼土が厚く堆積してしまっていて、私達はこれを見ますと古代の歌に出てくる情景を思い出し、かつての人達のくらしを想像したものでした。

当時の日常の食器は大部分が土師器で出来ている（つき）高坏（たかつき）や浅い碗などです。高級品である須恵器は、来客用の為か神様への行事に使用したもので、この他黒色土器というものも使用することがありました。

当時の食物はどのようなものだったのでしょうか。これも重要な問題です。水利がよくて水温が高いから、水稲栽培をされていてある程度の米の自給は出来たものと思われま

す。他には、アワ・ヒエ・キビなどが作られていたことでしょう。これ以外は自然の中で得られる山野の動植物で、シカ・イノシシなどが借馬遺跡で住居址の中から灰などと共に骨片となつて発見されていて、これらも参考となるものと思われ、更に近くの川から魚類は相当地に得られたものと思ひます。

次々と発見された遺構

借馬遺跡で私が現在重要なことと考えているものに、掘立柱だけの形を残した建物址が三十六棟も発見されたことです。これは高床式の建物ともいわれ、一般的に食糧などに特に米を貯蔵する倉庫の遺構であるといわれて来ました。既に弥生式文化で有名な遺跡として知られている静岡県の登呂遺跡などで発見されており、こうした時代から造られてあつたものです。借馬遺跡の場合を見ますと、その一棟づつに大小の違いが多くあり、柱穴などから見ててもとても重量のある米を大量に貯える構造とは見られないものがあります。従つてこれらを全て米の貯蔵用の倉庫として考えるより、むしろ現在でも農家は納屋（なや）とか毛小屋（けごや）と呼ぶ作業場を持つておるのように、私は古代にあつておるこの小屋を共有物として建てていたと考えた方がよいではないかと思つたものです。こうした見方ですと十数棟が作



竪穴住居址にて調査団一同

業小屋の可能性がありますが、それ以外の二十棟程が高床式の倉庫と考えられ、竪穴式住居址八十四戸に対し四対一位の割合で建てられていたことが分ります。古代の家族は一戸が数棟に分かれて生活していましたが、ここで四戸を一家族と仮に見た場合に、一家族が一棟づつの倉庫を持つていた可能性が出て来たわけですね。この高い割合は何が原因であるか今後の課題として見たいと思ひますが、若し、五世紀頃の古い年代から高床式の倉庫がこの地域に多く建てられていたとしたならば、私は古代社会と政治的な動向が強く働いていたと考えられるのではないかと見ています。これらは非常に広い借馬田圃の中での一部分の調査からで、これを強く推す考えではないのですが、何らかの問題はありそうです。（借馬遺跡調査団調査主任）

カモシカの争い

千葉 彬 司

カモシカについての会議の折、あるところのカモシカ飼育施設の係員が

「わたしのところのカモシカはしょっちゅうケンカばかりして困るが、みなさんのところではそういうことがありませんか」

と発言しました。今から十年ほど前のことです。この係員の所属する飼育施設は新たに施設を建設し飼育をはじめたばかりで、カモシカ飼育はもちろんはじめてのことでありました。

他の施設の係員はお互いにけんそうに顔を見あわせました。というのはいっているカモシカ飼育場は、間仕切りがされていて、中に一頭、多くても親子三頭が入っているくらいです。しかも、しょっちゅうケンカをするという事はみられないからです。

しかし、話をやりとりしているうちに、その原因がわかりました。その施設は山林の中

の一面をぐるりと柵でかこった中に何頭ものカモシカを一緒に入れてしまったのです。

カモシカは自然の中で生活する際、それぞれ自分のナワバリ(行動圏、生活域)を持ってその中で暮らしています。そのナワバリの広さはその地域の環境、特に植生によって左右されるようです。例えば北アルプスの白沢天狗山周辺の自然林や二次林の中にすむカモシカは百三十―百四十haもの広範囲を自分のナワバリとしています。食害が起きている植

林地のものはこのま、あるいは以下の広さしか持っていません。このようにそれぞれの地域でナワバリの面積が違う主要な要因はエサとなる植物の量の多少が関係しているのではないかと考えられています。

このカモシカの持っているナワバリはどのようなにしてわかるのでしょうか。カモシカには眼の下に眼下腺と呼ばれる穴があつて、そこから出る液を木の枝や岩などにすりつけて



闘争死のメス 下方に子が出かかっていた松川村乳川入

る習性があります。また、木の幹に角をすりつけた跡の「角とぎ跡」、タメ糞など、それぞれナワバリを示すサインポストのひとつであると考えられています。さらにカモシカ

の場合ナワバリとはいうものの、それほどきついものではなく、多少ナワバリの中に他のカモシカが入ってきててもよほどのことがない限り、好んで争いを起すようなことはないようです。

それでも時々カモシカ同志の争いが起ることは、私たちの博物館で今までに数頭の争いによって負傷したり死亡しているものを取り容れていることからわかります。また、これらのカモシカ収容がある季節に片寄っているわけではありませんので、争いが起るのどの季節かと特定することは今のところ難しいのではないかと思います。

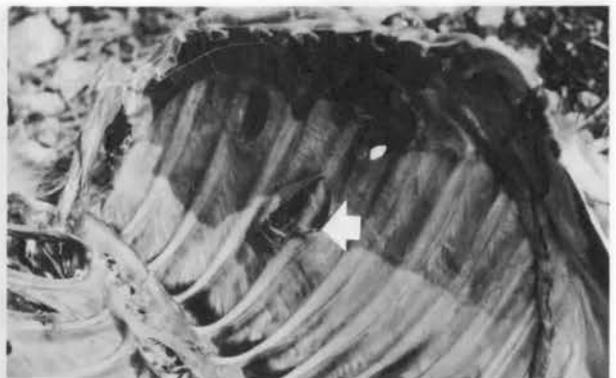
争いはオス同志と思われる方もあるかも知れませんが、メスの闘争死体も収容されているところからオス同志のみと決めつけることもできません。前出の飼育施設はカモシカが群生活のできないことを知らずに、一区画にたくさんのカモシカを入れたためにケンカがしょっちゅう起ってしまったのです。

カモシカの攻撃用の最大の武器はそれはないことでもがんで鋭い先を持った角であり、攻撃をする時は頭を下げ角を相手の方に向けて下からすくい上げるようにして突進、後退、突進を繰り返します。

争うカモシカ同志の間に強弱があつた場合などは数回双方が角突きあいをしただけで、弱い方は逃げてしまいます。しかし同じ程度の実力の持主ともなりますと、どちらか片方が重傷を負って倒れてしまうまで激しく争います。

私たちが収容したこの「負けカモシカ」は受けた傷がひどく一頭も回復した例はなく全死してしまいました。解剖してみると、刺し傷が深く肺や腸にまで達しており、肋骨が何本も折れてしまっているものもありました。これでは助からないのも無理はありません。

しかし双方が命をかけて行なう争いは、そう



刺傷の穴 肋骨の骨折(矢印)

めつたに起ることはありません。が、カモシカが自分のナワバリを守ろうとするのは、「ナワバリ」を失うことは自分のすむ場所を失うことになるわけですから、命をかけてたかかうのは当然なのかも知れません。(山博学芸員)

お知らせ

新館開館は6月5日です。旧館は5月5日まで開館、5月6日より6月4日まで休館となります。

山と博物館 第27巻 第4号
発行所 長野県大町市 TEL.0261-2111
印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館
定価 年額一〇〇円(送料共) 印刷部
郵便振替口座番号 長野四一三三九三二